フォーラム人間科学 第２部「人間科学とは何か」

「人間を科学する／科学を人間(化)する」
—再構築される「知」としての「人間科学」

尾崎博美
東洋英和女学院大学
人間科学部 人間科学科

目次

1.東洋英和女学院大学の学部・学科
2.「英和スピリッツ」—見えないものが見えてくる
3. 人間を科学する—3人称の視点？
4. 科学を人間（化）すること—2人称の視点
-Educated Personの問い
5. 再構築される「知」としての「人間科学」

Ⅰ．東洋英和女学院大学の学部・学科：２学部４学科

- 人間科学部
  - 人間科学科 140名
    - 心理科学専攻
    - 教育・人間学専攻
  - 保育子ども学科 100名
- 国際社会学部
  - 国際社会学科 120名
  - 国際コミュニケーション学科 120名

Ⅰ－２．人間科学部の学び

◆人間科学科

Point1▸2年次から専攻に分かれる
心理科学専攻／教育･人間学専攻
Point2▸大学院(六本木キャンパス)への
内部推薦入試制度有

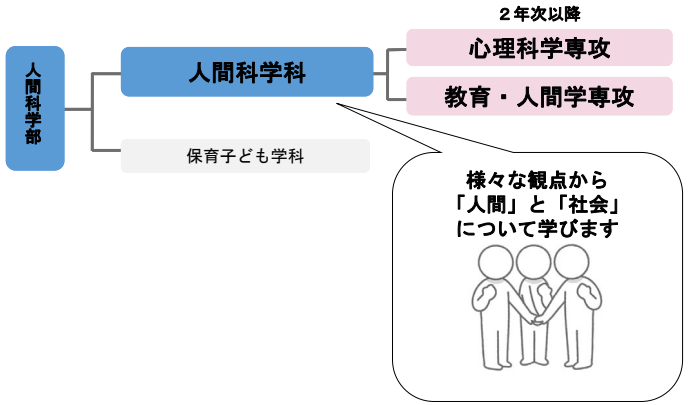
◇保育子ども学科

2つの資格を同時に取得可能！
幼稚園教諭一種免許状･保育士資格

Point1▸大学付属かえで幼稚園の見学
Point2▸就職決定率100%

ピアノ室、実習室…施設も充実しています。

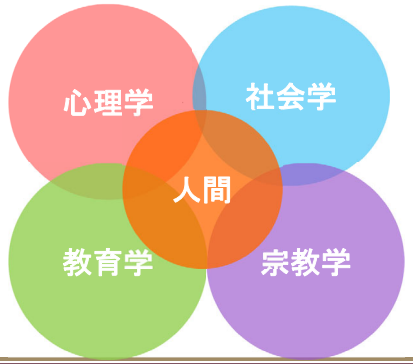
Ⅰ－３．人間科学科の学び：2つの専攻



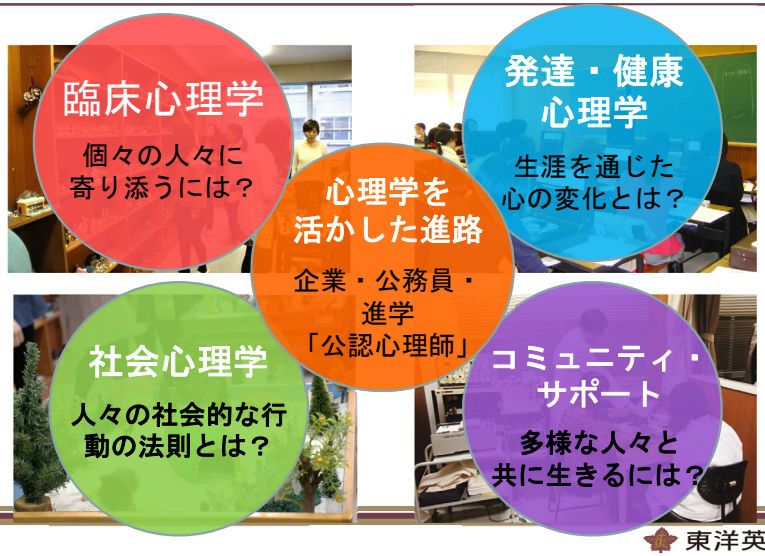
Ⅰ－４．人間科学科の学び：4つの柱

人間と社会への多様なアプローチ

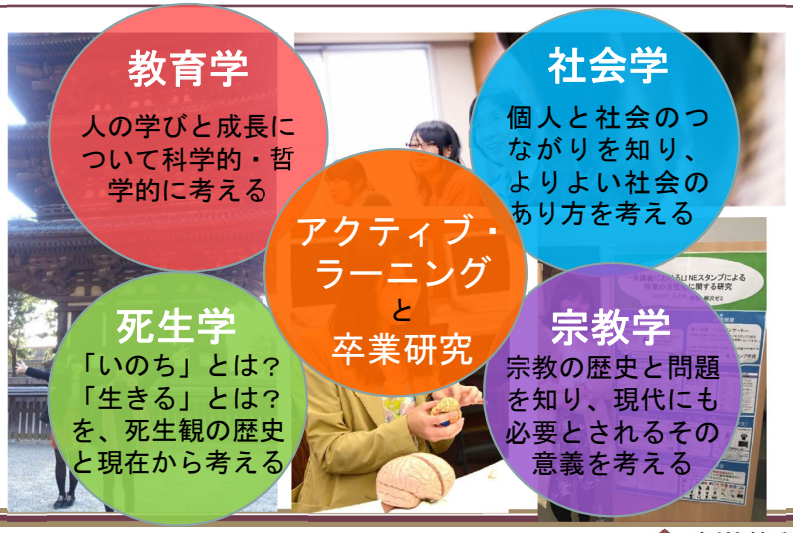
心理学・社会学・教育学・宗教学の4つを軸として、人間と社会について学んでいきます。



Ⅰ－５．人間科学科の学び：心理科学専攻



Ⅰ－６．人間科学科の学び：教育・人間学専攻



2．英和スピリッツ

英和スピリッツ
「誰かのために、まず私から始めましょう」

- 自立心を呼び起こす
- 成長を加速する
- 好奇心に火をつける
- 見えないものが見えてくる

2－2．アドミッション・ポリシー

■人間科学科は、人のこころや人間性について幅広く学ぶことを通して、心理・教育・社会・宗教等のさまざまな問題を科学的に捉え、多様な人々と協働しながら問題解決を実現する人材を育成します。

■求める学生像（将来の進路）

人間科学科は、自分自身の個性や能力を活かし、幅広く人とかかわる職業・分野で活躍することを希望する学生を求めます。

2－3．見えないものが見えてくる　とは

○なぜ見えないのか？

○見えるようになる

⇒「視点」の獲得・「視野」の拡大

○「出会い」という言葉の解釈

× 珍しいもの、知らないものの発見

↓

○ 見慣れた（はず）のものの新しい見え方

3－1　人間を科学すること―3人称の視点？

月　日　曜日　天候：			組　歳児
在籍数　名・出席数　名		担任　先生	
《実習目標》			
時間	環境設定	子どもの動き・活動	実習生の活動・気づき

①子どもの活動と実習生の活動とを分離して記述する

②「Ａちゃんが Ｂちゃんを叩いて意地悪をした」

→「Ａちゃんが Ｂちゃんを叩いた」（行為のみを記述）

３－２ 3人称の視点の問題点：「一般化」の陥穽

＊行動観察をどのように行うかについての学生の訓練マニュアルにおける第一原則は、記述は解釈と分けるべし、ということ…である。（レディ、２０１５、p.１３）

＊身体の行動は観察者には明白であるが、他方、「心的な」とか「意図的な」意味は不透明であり、解釈と推論によってのみ扱い得るとされる。（*Ibid.*）

〇学生は、現場を「三人称的理論」の視点から「観察者として」見る態度を求められる。

＝「単なる主観としての一人称」と「一般化された理論としての三人称」によってのみ認識が構築される。

(Reddy 2008=レディ 2015)

３－３ 3人称の視点の問題点：「傍観者」の視点

＊心についての傍観者の理論（bystander's theories）

→子どもが存在する現場における学生の不在

＊一人称路線も三人称路線も、他者の心を知るのは当てはめ過程によるとしている。（*Ibid.*, p.３２）

→①子ども（実践）と理論が一対一で対応するという誤謬

→②「子どもを理解する」ことと「子どもとかかわり合う」こととの分離

「理論」における二人称的視点の必要性

＝関係性（かかわり合い）を前提とした理論の構築

３－４ 伝統的なＥｄｕｃａｔｅｄ Ｐｅｒｓｏｎ

価値ある知識を多く持ち、自分自身のなかで完全に整合性のある理解・判断をすることができる。

しかしながら‥

①自らに与えられる知識に対する批判的思考がない

②現実世界の諸問題を解決することを強く望まずに判断（思考）する。

（例えば、科学を理解するが、科学の用途を心配することはない）

③他者に対する親切な振る舞いや他者の幸福への関心を持たない。

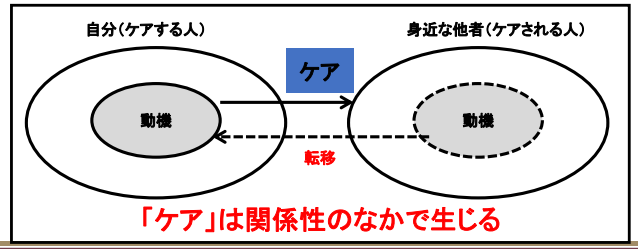
「象牙の塔の住人(Ivory Tower People)」

４－１科学を人間（化）する―2人称の視点

（１）ネル・ノディングズ『ケアリング』

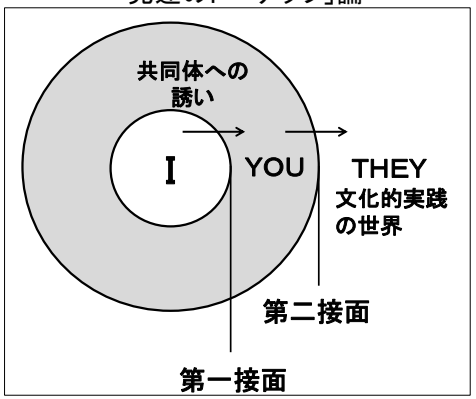
＊人間存在として，わたしたちは，ケアし，ケアされたいと思っている。（ノディングズ、1997, p.11）

＊「身近な他者へのケア Caring For」
「見知らぬ他者へのケア Caring About」



４－２ 科学を人間（化）する―視点の拡大

「発達のドーナッツ」論

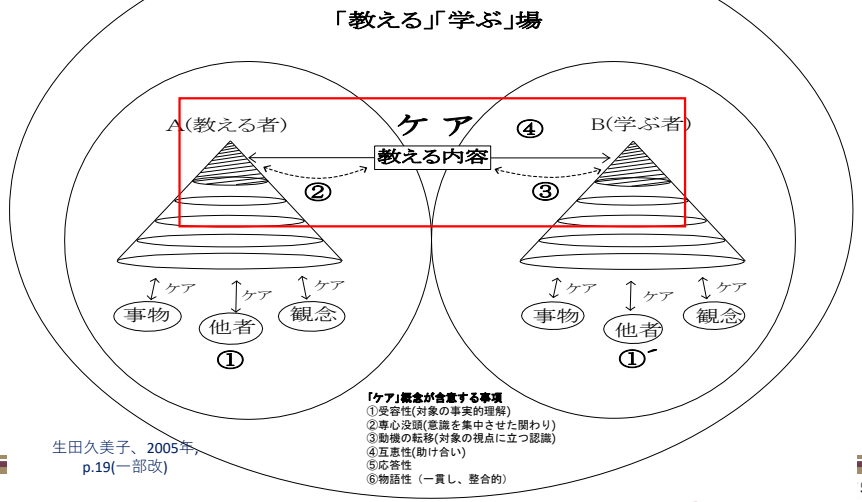


（佐伯胖、2014年、p.154）

○「YOU」の世界と「THEY」の世界は分離しているのではなく、「THEY」世界それ自体が「YOU」の視点を含んでいるものとして経験される。

４－３ 科学を人間（化）する―関係性のなかの「見える」

ケアリングに基づく「教える－学ぶ」



生田久美子、2005年、p.19(一部改)

４－４ 科学を人間（化）する　事例①

Ｊ．Ｒ．マーティン『スクールホーム』

マリア・モンテッソーリの「子どもの家(Casa dei Banbini)」
→彼女の用いた科学的な方法は、今日支配的な科学とは全く別のものである。（マーティン、1992、p.43）

◎通常、科学は個人の独自性や複雑性を克服すべき問題だとみなす。・・科学はまた、個人的な感情や関係性を客観性への障害であると考える。・・今日の科学者は、研究対象から距離をとるように訓練されている。・・科学者は均一性を要求して、ものごとの個性に寄与しているようなものはすべて無視するようにと教えられる。（p.４４）

４－５ 科学を人間（化）する　事例②

モンテッソーリの「科学」
＝ケアリング論の視点に立つ、二人称的「科学」のアプローチ
①「教科(サブジェクト・マター)」の複雑性を尊重するような考え方を模索する
②研究対象となる子どもたちに愛情を抱き、彼らと親密な関係を前提とする
③子どもたちの視点にまで降りていき、そのシステムに入り込む (*Ibid.*, p.44)

①「個別性」と「関係性」を前提する「理論」
②観察者＝参加者としての教師・保育者

５－１　再構築される「知」としての「人間科学」

（１）三人称的視点の獲得と訓練（「理論」の獲得）を経た後の、二人称的実践への参加と理解という学びの獲得と訓練

（**observationとparticipationの統合**）

（２）自分自身が子どもとの関係性における参加者であり子どもの様子や活動の変数の一つであるという自覚と活用の形成

（**personalに基づく「複雑性」**）

（３）心理学・教育学の理論自体を二人称的な視点から再構築することの必要性（cf.レディ、佐伯、マーティン）

５－３　再構築される「知」としての「人間科学」

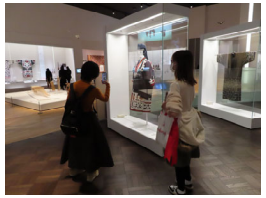
〇ゼミ活動を4年間を通して行う意義

1年次から始まる少人数のゼミナールは学びの基盤
大学で学ぶための基本的スキルの習得から、専門的な演習・研究まで、学年が上がるにつれて高度な取り組みへ

1年次：フレッシュマン・セミナー
⇒大学での学びの基礎（アカデミック・スキルの習得）
2年次：人間科学基礎演習
⇒専攻を超え、幅広い領域から専門の学びの基礎を習得
3・4年次：心理科学演習・人間科学演習＋卒業研究
⇒所属する専攻の中から、自らが興味をもつ研究領域について深く学んでいきます。また、卒業論文・研究に取り組みます。

５－３　再構築される「知」としての「人間科学」

〇大学における体験型学習の意義



フィールドワーク
図書館・美術館・博物館など様々なフィールドを体験

歴史文化研修
現地研修を通じて歴史や文化を学生主体に学ぶ

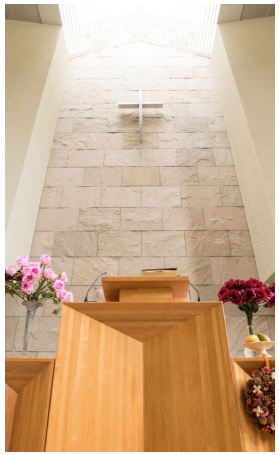
５－４　再構築される「知」としての「人間科学」

人間科学（科）の学び

①主体的に学び、人や社会と関わり、具体的な行動に移す態度

②①のために必要な基礎的知識と技術

③自ら問題を発見して解決していく思考力・判断力と、それらを表現する力



引用・参考文献

・生田久美子、1987年（2004年）『「わざ」から知る（認知科学選書14）』、東京大学出版会

・生田久美子、2005年「「知」の一様式としての「ケア」―ジェンダーの視座に立つ教育哲学からの提言」辻村みよ子監修・生田久美子編著『ジェンダーと教育――理念・歴史の検討から政策の実現に向けて』東北大学出版会、pp.5-23

・Martin, J. R., 1992, *The Schoolhome: Rethinking Schools for Changing Family*, Harvard University Press〔邦訳：邦訳：ジェーン・R・マーティン著、生田久美子監訳、2007年『スクールホーム―ケアする学校』、東京大学出版会〕

・ Noddings, N., 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, University of California Press〔邦訳：ネル・ノディングズ著、立山善康他訳、1997年『ケアリング　倫理と道徳の教育―女性の観点から』晃洋書房〕

・尾崎博美、2015年「ケアは自律を超えるか？」、下司晶編、『「甘え」と「自律」の教育学』、世織書房、（第Ⅱ部第4章担当）pp.184-208

・尾崎博美、2016年「本当に「優しい」とはどういうことか？―「ケア」と「共感」に基づく倫理性と知性―」、井藤元編『ワークでまなぶ道徳教育』、ナカニシヤ出版、pp.84-98

・Reddy, V., 2008, *How Infants know minds. Harvard,* University Press〔邦訳：ヴァスデヴィ・レディ著、佐伯胖訳、2015年『驚くべき乳幼児の心の世界：「二人称的アプローチ」から見えてくること』、ミネルヴァ書房〕

・佐伯胖、2007年『共感―育ち合う保育のなかで―』、ミネルヴァ書房

ご清聴ありがとうございました。